

1 課

7月4日

コリントにおける パウロの働き

安息日午後

6月27日

暗証聖句

すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた、「恐れるな。語りつづけよ。黙っているな。あなたには、わたしががついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。(使徒行伝 18:9、10、口語訳)

ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」(使徒言行録 18:9、10、新共同訳)

今週の聖句

I コリント 1:1、ガラテヤ 1:1、使徒言行録(使徒行伝) 17:16～34、I コリント 5:9～11、使徒言行録(使徒行伝) 18:4～10、II コリント 2:4

今週のテーマ

偉大な英国人宣教師ウィリアム・ケアリーは、かつてこう言っていました。「生活費を稼ぐために靴を修理しているが、本当の仕事は魂を救うことだ」。

同様に、パウロも生活のためにテント造りをしていましたが(使徒 18:1～3)、言うまでもなく、彼の真の仕事は人々をキリストへ導くことでした。

今週私たちは、コリントの町の教会に対するパウロの働きの一端を見ていきます。この教会は、問題をたくさん抱えていましたが、その多くは、2000年ほど経った今日の教会が直面する問題とよく似ています。実際、ある程度の期間、キリスト教の中に身を置いた人や教会活動に関わってきた人なら、こう尋ねたくなるかもしれません。「問題のないクリスチャンの集まりを、あなたは見たことがありますか」。その答えは、言うまでもなく明らかです。

パウロはコリントの難題に、十字架のメッセージで立ち向かいました(I コリ 2:2)。このメッセージに忠実であることが、今日、私たちが直面する難題に立ち向かう道でもあります。今週、そして今期を通じて見ていくように、コリントの信徒への手紙(コリント人への手紙)のメッセージは、私たちの生活にも当てはまります。

使徒 18:1～3 (新共同訳)

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウドィウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、

18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。

I コリ 2:2 (新共同訳)

2:2 なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。

使徒 18:1～3 (口語訳)

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 そこで、アキラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウドィウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。

18:3 パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であった。

I コリ 2:2 (口語訳)

2:2 なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。

日曜日 6月28日 神に召されたイエスの使徒、パウロ

パウロは、コリントの信徒への手紙(コリント人への手紙)の冒頭で、自分を「神の御心によって」〔口語訳:神の御旨により〕召されたイエスの使徒であると紹介しています(Iコリ 1:1、IIコリ 1:1と比較)。イエスとの関係において自分は何者なのかということに対する彼の確信は非常に固く、いくつかの例外を除いて、彼はすべての手紙をこのように書き始めています。

問1 Iコリント 1:1 とローマ 1:1 を読んでください。これらの聖句では、パウロの働きのどんな二つの要素が強調されていますか(ガラ 1:1 も参照)。

パウロは、自分の召しと使徒職が神の御心の成就であると述べています。彼は、自分の召しが人からではなく、神からのものであると確信していました(ガラ 1:1)。パウロは神の恵みの業として(ガラ 1:15)、エレミヤのように母の胎内にいるときから神によって召されていました(エレ 1:5)。それは、異邦人の間でキリストの福音を宣べ伝えるためでした。

Iコリント 15:8でパウロは、キリストが復活後に姿をあらわされた者たちの中に自分を含めており、続く数節では、彼が使徒として召されたのは、そのイエスとの出会いの結果であることを示唆しています(Iコリ 15:9～11)。

「イエスの使徒」という称号は、いくつかの概念を含んでいます。第一に、それは、イエスが遣わされた者という概念を含んでいます。しかし同時に、パウロはこの表現を用いて、自分をキリストの僕(ロマ 1:1、テト 1:1、ガラ 1:10)、宣教者(Iテモ 2:7)、教師(IIテモ 1:11)であるとも見なしています。彼が説教しようと教えようと、常

にキリストが明らかに示されていました。要するに、パウロは**イエスの使徒**だったのです。

イエスは、パウロの使徒職の中心であるだけでなく、パウロの人生の中心でもありました。パウロの思いと感情も、イエスの存在で満たされていました。その事実を裏づける証拠として、彼はコリントの信徒への手紙Ⅰ（**コリント人への第一の手紙**）の冒頭と感謝の部分〔**Ⅰコリ 1:1～9 参照**〕で、繰り返し（9節で9回も）イエスに言及しています。パウロはイエスをそれほど深く愛していたので、イエスについて考え、語ることをやめることができなかったのです。彼は、自分に託された人々にイエスを伝え、彼らの人生もまたキリスト中心となるように願っていました。パウロは使徒となるように召されましたが、コリントの信徒たちも主が召されたそれぞれの立場において、イエスの忠実な弟子となるように召されていたのです。

【参考】英語テキストにある文

Paul was called to be an apostle. What is your calling, and how do you know that it is your calling? If you don't think you have one, why not go right now and ask Him to show you the work He chose you to do?

パウロは使徒として召されました。あなたはどんな召しを受けていますか。それが自分の召しだとどうしてわかるのでしょうか。もし自分には召しがないと思うなら、今すぐ、神の御前に行き、あなたに任された働きを神が示してくださるよう、神に願ってみてはいかがでしょうか。

5

Ⅰコリ 1:1 （新共同訳）

1:1 神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、

Ⅱコリ 1:1 （新共同訳）

1:1 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会と、アカイア州の全地方に住むすべての聖なる者たちへ。

ロマ 1:1 （新共同訳）

1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、――

ガラ 1:1 （新共同訳）

1:1 人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、

ガラ 1:15 （新共同訳）

1:15 しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、

Ⅰコリ 1:1 （口語訳）

1:1 神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、

Ⅱコリ 1:1 （口語訳）

1:1 神の御旨によりキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカヤ全土にいるすべての聖徒たちへ。

ロマ 1:1 （口語訳）

1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召されて使徒となったパウロから――

ガラ 1:1 （口語訳）

1:1 人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ、

ガラ 1:15 （口語訳）

1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、

エレ 1:5 (新共同訳)

1:5「わたしはあなたを母の胎内に造る前から/あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に/わたしはあなたを聖別し/諸国民の預言者として立てた。」

I コリ 15:8~11 (新共同訳)

15:8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

15:9 わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。

15:10 神の恵みによって今日のわたしがあのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。

15:11 とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。

テト 1:1 (新共同訳)

1:1 神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから——わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた人々の信仰を助け、彼らを信心に一致する真理の認識に導くためです。

ガラ 1:10 (新共同訳)

1:10 こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

I テモ 2:7 (新共同訳)

2:7 わたしは、その証しのために宣教者また使徒として、すなわち異邦人に信仰と真理を説く教師として任命されたのです。わたしは真実を語っており、偽りは言っていない。

II テモ 1:11 (新共同訳)

1:11 この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました。

エレ 1:5 (口語訳)

1:5「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」。

I コリ 15:8~11 (口語訳)

15:8 そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。

15:9 実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であって、使徒と呼ばれる値うちのない者である。

15:10 しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜わった神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあった神の恵みである。

15:11 とにかく、わたしにせよ彼らにせよ、そのように、わたしたちは宣べ伝えており、そのように、あなたがたは信じたのである。

テト 1:1 (口語訳)

1:1 神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから——わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた者たちの信仰を強め、また、信心にかなう真理の知識を彼らに得させるためであり、

ガラ 1:10 (口語訳)

1:10 今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。

I テモ 2:7 (口語訳)

2:7 そのために、わたしは立てられて宣教者、使徒となり（わたしは真実を言っている、偽ってはいない）、また異邦人に信仰と真理とを教える教師となったのである。

II テモ 1:11 (口語訳)

1:11 わたしは、この福音のために立てられて、その宣教者、使徒、教師になった。

I コリ 1:1～9 (新共同訳)

1:1 神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、

1:2 コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。

1:3 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

1:4 わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。

1:5 あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。

1:6 こうして、キリストについての証しがあなたがたの間で確かなものとなったので、

1:7 その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。

1:8 主も最後まであなたがたをしっかり支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者にしてくださいます。

1:9 神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

I コリ 1:1～9 (口語訳)

1:1 神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、

1:2 コリントにある神の教会、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの御名を至る所で呼び求めているすべての人々と共に、キリスト・イエスにあってきよめられ、聖徒として召されたあなたがたへ。このキリストは、わたしたちの主であり、また彼らの主であられる。

1:3 わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

1:4 わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みを思って、いつも神に感謝している。

1:5 あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にもすべての知識にも恵まれ、

1:6 キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、

1:7 こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいます。

1:8 主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう。

1:9 神は真実なかたである。あなたがたは神によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、はいらさせていただいたのである。

月曜日 6月29日 アテネからコリントへ

問2 使徒言行録(使徒行伝) 17:16～34 を読んでください。コリントへ行く前、パウロはどこにいて、そこで何をしましたか。

使徒言行録(使徒行伝) 17:16～34は、パウロがコリントへ行く前にアテネの人々に説教した様子を記しています。どうやら彼は、当初アテネを訪れる予定ではなか

ったようですが、ベレア(ベレヤ)で反対に遭ったため、友人たちの助けを借りてそこへ向かったのです(使徒 17:13~15)。

パウロに付き添ってアテネへ行った人々は、できるだけ早く合流するようにという、テモテとシラスに対する指示を受けてベレア(ベレヤ)に帰って行きました(使徒 17:15)。使徒言行録(使徒行伝) 17:16~34は、パウロがテモテとシラスを待っている間に何をしたかについて記しています。彼は、会堂、広場、アレオパゴスなどで、イエスについて語りました。パウロは、イエスについて語ることをやめられず、実際にあらゆる機会を利用して語ったのです。

問3 使徒言行録(使徒行伝) 18:1~11 を読んでください。パウロはコリントに到着したときに、またこの町に滞在している間中、何をしましたか。

パウロは、第二次宣教旅行中にコリントへ行きました。ルカは、パウロが1年6か月の間そこに滞在したと記しています。

いつものように、パウロは会堂で宣教活動を始めました(同 18:4~6)。使徒言行録(使徒行伝) 17:1、2 は、それが彼の習慣であったと述べています。彼は、イエスが使徒たちにお命じになったとおり(同 1:8 参照)、「まずユダヤ人に」伝えよという戦略(ロマ 1:16、使徒 13:46)に従いました。

ついにシラスとテモテがコリントで合流すると、「パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した」〔口語訳「パウロは御言を伝えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに力強くあかしした」〕(使徒 18:5)。コリント滞在中、パウロは忙しく「神の言葉を教え」〔口語訳「神の言を……教えつけ」〕(同 18:11)しました。また彼が、「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた」〔口語訳「わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心した」〕(I コリ 2:2)という有名な言葉を述べたのは、このような状況においてでした。

アテネとコリントにおけるパウロの宣教活動から、福音を宣べ伝えるあらゆる機会を活用することについて、私たちは何を学ぶことができるでしょうか。

【参考】英語テキストにある全文を記します。

What can we learn from Paul's missionary activity in Athens and Corinth? What makes sharing the gospel so challenging in our cities and communities today? How can we share the gospel with success in these difficult places? What strategies can we learn from Paul's missionary activity about how to best do that?

アテネやコリントにおけるパウロの宣教活動から、私たちは何を学ぶことができるでしょうか。今日の私たちの町や地域社会において、福音を宣べ伝えることがこれほどまでに難しくなっているのはなぜでしょうか。こうした困難な場所で、どうすれば福音を効果的に伝えることができるでしょうか。その最善の方法について、パウロの宣教活動からどのような戦略を学ぶことができるでしょうか。

使徒 17:13～34 （新共同訳）

17:13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、そこへも押しかけて来て、群衆を扇動し騒がせた。

17:14 それで、兄弟たちは直ちにパウロを送り出して、海岸の地方へ行かせたが、シラスとテモテはベレアに残った。

17:15 パウロに付き添った人々は、彼をアテネまで連れて行った。そしてできるだけ早く来るようにという、シラスとテモテに対するパウロの指示を受けて帰って行った。

17:16 パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。

17:17 それで、会堂ではユダヤ人や神をあがめる人々と論じ、また、広場では居合わせた人々と毎日論じ合っていた。

17:18 また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」と言う者もいれば、「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」と言う者もいた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。

17:19 そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。

17:20 奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ。」

17:21 すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。

17:22 パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつ一方であることを、わたしは認めます。

17:23 道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つ

使徒 17:13～34 （口語訳）

17:13 テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレアでも神の言を伝えていることを知り、そこにも押しかけてきて、群衆を煽動して騒がせた。

17:14 そこで、兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して、海へまで行かせ、シラスとテモテとはベレアに居残った。

17:15 パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行き、テモテとシラスとになるべく早く来るようにとのパウロの伝言を受けて、帰った。

17:16 さて、パウロはアテネで彼らを待っている間に、市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた。

17:17 そこで彼は、会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた。

17:18 また、エピクロス派やストア派の哲学者数人も、パウロと議論を戦わせていたが、その中のある者たちが言った、「このおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほかの者たちは、「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った。パウロが、イエスと復活とを、宣べ伝えていたからであった。

17:19 そこで、彼らはパウロをアレオパゴスの評議所に連れて行って、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。

17:20 君がなんだか珍らしいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」と言った。

17:21 いったい、アテネ人もそこに滞在している外国人もみな、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることのみに、時を過ごしていたのである。

17:22 そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立って言った。「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。

17:23 実は、わたしが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見ているうちに、『知られない神に』と刻

けたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。

17:24 世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。

17:25 また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要ありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。

17:26 神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。

17:27 これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。

17:28 皆さんのうちのある詩人たちも、『我らは神の中に生き、動き、存在する』『我らもその子孫である』と、言っているとおりです。

17:29 わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。

17:30 さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。

17:31 それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」

17:32 死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについて、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。

17:33 それで、パウロはその場を立ち去った。

17:34 しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはア

まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせあげよう。

17:24 この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。

17:25 また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、

17:26 また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。

17:27 こうして、人々が熱心に追ひ求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびひとりから遠く離れておいでになるのではない。

17:28 われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。

17:29 このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。

17:30 神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。

17:31 神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである。」

17:32 死人のよみがえりのことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、またある者たちは、「この事については、いずれまた聞くことにする」と言った。

17:33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。

17:34 しかし、彼にしたがって信じた者も、幾人かあった。その中には、アレオ

レオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた。

使徒 18:1～11 （新共同訳）

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、

18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。

18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。

18:5 シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した。

18:6 しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りがかれ。わたしは責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」

18:7 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。

18:8 会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。

18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。」

18:10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」

18:11 パウロは一年六か月の間ここにどまって、人々に神の言葉を教えた。

パゴスの裁判人デオヌシオとダマリスという女、また、その他の人々もいた。

使徒 18:1～11 （口語訳）

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 そこで、アクラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。

18:3 パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であった。

18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めた。

18:5 シラスとテモテが、マケドニヤから下ってきてからは、パウロは御言を伝えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに力強くあかしした。

18:6 しかし、彼らがこれに反抗してのしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらって、彼らに言った、「あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしは責任がない。今からわたしは異邦人の方に行く」。

18:7 こう言って、彼はそこを去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂と隣り合っていた。

18:8 会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信じた。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた。

18:9 すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた、「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。」

18:10 あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。

18:11 パウロは一年六か月の間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづけた。

使徒 17:1、2 (新共同訳)

17:1 パウロとシラスは、アンフィポリスとアポロニアを経てテサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂があった。
17:2 パウロはいつものように、ユダヤ人の集まっているところへ入って行き、三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い、

ロマ 1:16 (新共同訳)

1:16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

使徒 13:46 (新共同訳)

13:46 そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。

I コリ 2:2 (新共同訳)

2:2 なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。

使徒 17:1、2 (口語訳)

17:1 一行は、アムピポリスとアポロニアをとおって、テサロニケに行った。ここにはユダヤ人の会堂があった。
17:2 パウロは例によって、その会堂にはいつて行って、三つの安息日にわたり、聖書に基いて彼らと論じ、

ロマ 1:16 (口語訳)

1:16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

使徒 13:46 (口語訳)

13:46 パウロとバルナバとは大胆に語った、「神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならないかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。

I コリ 2:2 (口語訳)

2:2 なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。

火曜日 6月30日 コリントの町

問4 使徒言行録(使徒行伝) 18:1～3、I コリント 5:9～11、8:4 を読んでください。コリントの経済、道徳、宗教生活について、どんなことが推測できるでしょうか。

コリントは古代世界の重要な中心地であり、商業の繁栄で知られていました。この町は紀元前146年にローマによって破壊され、同44年にユリウス・カエサルによってローマの植民地として再建されました。新約聖書に登場するのは、このローマ時代のコリントです。パウロの在世当時、コリントはアテネのライバルの一つであり、さまざまな面でアテネをしのいでいました。コリントには二つの重要な港があり、商品の交換と商業の発展を容易にしていたのです。実際、パウロがコリントを選んだのは、その重要性和有利な地理的位置のためでした。「こうして福音を広める機会が与えられた。コリントに福音が根づけば、それは容易に世界のあらゆる地域に伝えられるだろう」(『パウロ略伝』99 ページ、英文)。

【参考】——Ellen G. White, *Sketches From the Life of Paul*, p. 99.

“An opportunity was thus presented for the spread of the gospel. Once established at Corinth, it would be readily communicated to all parts of the world.”

さらに、コリントの商業が盛んであったため、パウロはこの町で福音を宣べ伝えるかたわら、テントを作って売ることによって生計を立てやすかったと考えられます(使徒18:2, 3)。しかし、大きく豊かな町での宣教活動には、当然ながら困難も伴いました。コリントは、あからさまな宗教的多元主義(1コリ8:5)を特徴としており、そのことは、アポロ、アテナ、アフロディーテなどの神々を祭る神殿が数多く建てられていたことや、セラピスやイシスといったエジプトの神々まで礼拝されていたことから明らかでした。

こうした宗教的混乱に加え、コリントは性的放縦でも知られていました。ギリシアの地理学者で歴史家のストラボン⁷は、コリントの神殿にはアフロディーテ礼拝に身をささげた1000人の神殿娼婦がいたと述べています。多くの学者はこの主張を疑念の目で見ており、コリントに対するアテネのプロパガンダと結びつけていますが、儀式的な売春そのものは、古代世界において一般的な慣習でした。性的不道徳は、ほかの地域と同様、コリントでも問題であったのです。偶像礼拝と不道徳は日常生活の一部となっており、この悲しい現実が、二つのコリントの信徒への手紙(コリント人への手紙)の内容の多くを説明しています。

コリントでの宣教活動において、パウロは偶像礼拝と放縦に満ちた社会という問題に直面しました。今日の文化において、福音を宣べ伝えることを困難にしている問題は何ですか。どうすればそれらを克服できますか。コリントと今日の町の間には、もし違いがあるとすれば、どれほどの違いがあるのでしょうか。

使徒 18:1～3 (新共同訳)

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、

18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。

I コリ 5:9～11 (新共同訳)

5:9 わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけないと書きましたが、

5:10 その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。

使徒 18:1～3 (口語訳)

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。

18:2 そこで、アキラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。

18:3 パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であった。

I コリ 5:9～11 (口語訳)

5:9 わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけないと書いたが、

5:10 それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけないと、言ったのではない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事するな、ということだったのです。

I コリ 8:4、5 (新共同訳)

8:4 そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。

8:5 現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがないと、

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけない、食事を共にしてもいけない、ということであった。

I コリ 8:4、5 (口語訳)

8:4 さて、偶像への供え物を食べることにについては、わたしたちは、偶像なるものは実際は世に存在しないこと、また、唯一の神のほかには神がないことを、知っている。

8:5 というのは、たとい神々といわれるものが、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そして、多くの神、多くの主があるようではあるが、

水曜日 7月1日 「コリントの多くの人々」

問5 使徒言行録 (使徒行伝) 18:4～8 読んでください。パウロの宣教は、どんな成果をもたらしましたか。

コリントのユダヤ人の間でのパウロの働きは、彼が望んだほど実りあるものではなく、パウロは敵意と憎しみに直面しなければならませんでした。聖書には、「彼らは反抗し、冒瀆した」(使徒 18:6、英訳 NKJV “they opposed him and blasphemed.”)とあります。ギリシア語の動詞「blasphēmeō」(「冒瀆する」)の目的語が人間である場合、「ののしる」または「中傷する」という意味になります。言い換えれば、彼らはパウロの評判を落とし、宣教活動の成功を阻もうとしたのです。

辛いことに、コリントの会堂におけるパウロの働きは、無駄にはなりません。結局のところ、宣教の責任は、神が担っておられたのです。「わたしの口から出るわたしの言葉も/むなしくは、わたしのもとに戻らない」[口語訳「わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない」](イザ 55:11)と、神は約束されました。ユダヤ人の中には、会堂長のクリスポとその一家がイエスをメシアとして受け入れ、バプテスマを受けるとは予想していなかった人もいました(使徒 18:8)。彼らだけでなく、「コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた」[口語訳「多くのコリント人も、パウロの話を受けて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた」](同 18:8)のです。クリスポの影響も大いにあったのでしょう。

問6 使徒言行録 (使徒行伝) 18:9、10 を読んでください。コリントでの困難に直面したパウロの気持ちについて、どんなことが推測できるでしょうか。神はどのようにご自分の僕を励まされましたか。

ユダヤ人の会堂を去ったあと、パウロは励まされる経験をしました。夜の幻の中でキリストご自身がパウロに姿をあらわされ、イザヤ41:10を思い起こさせる言葉を語られたのです。「恐れるな。……わたしがあなたと共にいる」〔口語訳「恐れるな。……あなたには、わたしがついてる」〕(同 18:9～10)。実際、パウロはコリントにいたとき、「衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」〔口語訳「弱くかつ恐れ、ひどく不安であった」〕(1 コリ 2:3)と認めています。彼は強固な反対のために、ベレア(ベレヤ)からアテネへ去らねばなりませんでした。彼は同じ理由で、つまり激しい反対のためにコリントを去らねばならないのだろうと考えていたようです。しかし、今回はそうなりませんでした。イエスはパウロに、「この町には、わたしの民が大勢いる」〔口語訳「この町には、わたしの民が大ぜいいる」〕(使徒 18:10)と言われました。そしてパウロは、彼らに救いの知らせを伝えるためのイエスの器となったのです。

【参考】英語テキストにある全文

Read Isaiah 41:10. What wonderful promises does God give you in this verse? What hope do they give you right now in your life?

イザヤ 41:10 を読んでください。この節で神はあなたにどのような素晴らしい約束をされていますか。それらは今のあなたの人生にどんな希望を与えてくれますか。

8

使徒 18:4～10 (新共同訳)

18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。

18:5 シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した。

18:6 しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかけられ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」

18:7 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。

18:8 会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。

18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。」

18:10 わたしがあなたと共にいる。だから

使徒 18:4～10 (口語訳)

18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めた。

18:5 シラスとテモテが、マケドニアから下ってきてからは、パウロは御言を伝えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに力強くあかしした。

18:6 しかし、彼らがこれに反抗してのしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらって、彼らに言った、「あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしには責任がない。今からわたしは異邦人の方に行く」。

18:7 こう言って、彼はそこを去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂と隣り合っていた。

18:8 会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信じた。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた。

18:9 すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた、「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。」

18:10 あなたには、わたしがついてる。

ら、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」

イザ 55:11 (新共同訳)

55:11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も/むなしくは、わたしのものと戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ/わたしが与えた使命を必ず果たす。

イザ 41:10 (新共同訳)

41:10 恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け/わたしの救いの右の手であなたを支える。

I コリ 2:3 (新共同訳)

2:3 そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。

だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。

イザ 55:11 (口語訳)

55:11 このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す。

イザ 41:10 (口語訳)

41:10 恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。

I コリ 2:3 (口語訳)

2:3 わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であった。

木曜日 7月2日 コリント信徒へのパウロの手紙

問7 I コリント 1:11～13、4:14、5:11、7:1、14:37、40 を読んでください。また、II コリント 1:12、2:9、11:3、13:10 も読んでください。これらの箇所は、パウロがコリントの信徒に手紙を書いた理由を理解するうえで、いかに役立ちますか。

コリントの信徒への手紙 I (コリント人への第一の手紙)を書いたとき、パウロはエフェソ(エペソ)にいました(I コリ 16:5～9)。その彼のもとにクロエの家の人たちが訪れ、コリントの状況があまり良くないと知らせたのです(同 1:11)。I コリント1～6章でパウロは、クロエを通して持ち込まれた問題に対処しています。その問題には、分派争い、性的不道徳、訴訟、売春などが含まれています。パウロはまた、具体的な質問が書かれた手紙も受け取っていました(同 7:1)。彼の回答は、7章以降に記されています。その質問は、結婚、離縁、独身生活、偶像に供えられた肉、礼拝での振る舞い、霊的な賜物の用い方、復活についての誤った理解などに関するものでした。コリントの教会は非常に問題が多く、未熟であったのです。おそらく、あなたが所属する教会にも多くの問題があるでしょう。しかしコリントの教会は、おそらくそれ以上に深刻でした。

コリントの信徒への手紙 I (コリント人への第一の手紙)は、私たちの時代とも大いに関連しています。結局のところ、現代の多くの教会も、ある程度同じような問題に直面しているのではないのでしょうか。この手紙は、「彼のすべての手紙の中で最も豊かで、最も教訓に富み、最も力強い手紙の一つ」(『希望への光』1469 ページ、『患難

から栄光へ』第29章)であり、私たちに多くのことを語りかけています。

パウロはコリントの信徒に、3通か4通の手紙を書いた可能性があります(Ⅱコリ 10:9 と比較)。彼は、コリントの信徒への手紙Ⅰ(コリント人への第一の手紙)よりも前に最初の手紙を書きましたが(Ⅰコリ 5:9)、それは失われています。コリントの信徒への手紙Ⅱ(コリント人への第二の手紙)の前にも、学者たちが「厳しい手紙」(Ⅱコリ 2:3、4、9、7:8)と呼ぶ手紙を書きましたが、これも失われています。ある人たちは、その手紙はコリントの信徒への手紙Ⅰ(コリント人への第一の手紙)を指しているのではないかと、その手紙の一部がコリントの信徒への手紙Ⅱ(コリント人への第二の手紙)の中に残されていると考えています。

コリントの信徒への手紙Ⅱ(コリント人への第二の手紙)から、コリントの教会員が周囲の文化の影響を受けていたことがわかります。彼らは、競争、権力、富といったものを重視していましたが、これらはみな、現代の私たちの教会にとっても問題となりうるものです。これに対してパウロは、キリストを中心とした文化、つまり福音のレンズを通した世界観を生み出そうとしました。私たちにとっても、現代の世界を福音のレンズを通して見ることは、どれほど重要でしょうか。

【参考】英語テキストにある文

Read 2 Corinthians 2:4 again. What does this verse tell you about how much Paul cared for these people? In contrast, how much love is in your heart for others?

Ⅱコリント 2:4 をもう一度読んでください。この聖句は、パウロがこれらの人々をどれほど気にかけていたか、あなたにどのように伝えていますか。それに対して、あなたの心には他者への愛がどれほどあるでしょうか。

9

Ⅰコリ 1:11~13 (新共同訳)

1:11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。

11:12 あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っているとのことなのです。

11:13 キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。

Ⅰコリ 4:14 (新共同訳)

4:14 こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです。

Ⅰコリ 1:11~13 (口語訳)

1:11 わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞かされている。

11:12 はっきり言うと、あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケバに」「わたしはキリストに」と言い合っていることである。

11:13 キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか。

Ⅰコリ 4:14 (口語訳)

4:14 わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさすためである。

I コリ 5:11 (新共同訳)

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事をするな、ということだったのです。

I コリ 14:37、40 (新共同訳)

14:37 自分は預言する者であるとか、霊の人であると思っている者がいれば、わたしがここに書いてきたことは主の命令であると認めなさい。

14:40 しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい。

II コリ 1:12 (新共同訳)

1:12 わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです。

II コリ 2:9 (新共同訳)

2:9 わたしが前に手紙を書いたのも、あなたがたが万事について従順であるかどうかを試すためでした。

II コリ 11:3 (新共同訳)

11:3 ただ、エバが蛇の悪くみで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配しています。

II コリ 13:10 (新共同訳)

13:10 遠くにいてこのようなことを書き送るのは、わたしがそちらに行ったとき、壊すためではなく造り上げるために主がお与えくださった権威によって、厳しい態度をとらなくても済むようにするためです。

I コリ 16:5~9 (新共同訳)

16:5 わたしは、マケドニア経由でそちらへ行きます。マケドニア州を通りますから、

16:6 たぶんあなたがたのところに滞在し、場合によっては、冬を越すことになるかもしれません。そうなれば、次にどこに出かけるにしろ、あなたがたから送

I コリ 5:11 (口語訳)

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけない、食事を共にしてもいけない、ということであった。

I コリ 14:37、40 (口語訳)

14:37 もしある人が、自分は預言者が霊の人であると思っているなら、わたしがあなたがたに書いていることは、主の命令だと認めるべきである。

14:40 しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい。

II コリ 1:12 (口語訳)

1:12 さて、わたしたちがこの世で、ことにあなたがたに対し、人間の知恵によってではなく神の恵みによって、神の神聖と真実とによって行動してきたことは、実にわたしたちの誇りであって、良心のあかしするところである。

II コリ 2:9 (口語訳)

2:9 わたしが書きおくったのも、あなたがたがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほかならなかった。

II コリ 11:3 (口語訳)

11:3 ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。

II コリ 13:10 (口語訳)

13:10 こういうわけで、離れていて以上のようなことを書いたのは、わたしがあなたがたの所に行ったとき、倒すためではなく高めるために主が授けて下さった権威を用いて、きびしい処置をする必要がないようにしたためである。

I コリ 16:5~9 (口語訳)

16:5 わたしは、マケドニアを通過してから、あなたがたのところに行くことになる。マケドニアは通過するだけだが、16:6 あなたがたの所では、たぶん滞在するようになり、あるいは冬を過ごすかも知れない。そうなれば、わたしがどこへ行くにしても、あなたがたに送ってもら

り出してもらえましょう。

16:7 わたしは、今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくない。主が許してくだされば、しばらくあなたがたのところに滞在したいと思っています。

16:8 しかし、五旬祭まではエフェソに滞在します。

16:9 わたしの働きのために大きな門が開かれているだけでなく、反対者もたくさんいるからです。

Ⅱコリ 10:9 (新共同訳)

10:9 わたしは手紙であなたがたを脅していると思われたくない。

Iコリ 5:9 (新共同訳)

5:9 わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけなと書きましたが、

Ⅱコリ 2:3、4、9 (新共同訳)

2:3 あのようなことを書いたのは、そちらに行って、喜ばせてもらえるはずの人たちから悲しい思いをさせられたくなかったからです。わたしの喜びはあなたがたすべての喜びでもあると、あなたがた一同について確信しているからです。

2:4 わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。あなたがたを悲しませるためではなく、わたしがあなたがたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもらうためでした。

2:9 わたしが前に手紙を書いたのも、あなたがたが万事について従順であるかどうかを試すためでした。

Ⅱコリ 7:8 (新共同訳)

7:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、わたしは後悔しません。確かに、あの手紙が一時にもせよ、あなたがたを悲しませたことは知っています。たとえ後悔したとしても、

えるだろう。

16:7 わたしは今、あなたがたに旅のついでに会うことは好まない。もし主のお許しがあれば、しばらくあなたがたの所に滞在したいと望んでいる。

16:8 しかし五旬節までは、エペソに滞在するつもりだ。というのは、有力な働き者の門がわたしのために大きく開かれているし、

16:9 また敵対する者も多いからである。

Ⅱコリ 10:9 (口語訳)

10:9 ただ、わたしは、手紙であなたがたをおどしているのだと、思われたくない。

Iコリ 5:9 (口語訳)

5:9 わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけなと書いたが、

Ⅱコリ 2:3、4、9 (口語訳)

2:3 このような事を書いたのは、わたしが行く時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせられたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。

2:4 わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくれた。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに対してあふれるばかりにいただいているわたしの愛を、知ってもらうためであった。

2:9 わたしが書きおくれたのも、あなたがたがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほかになかった。

Ⅱコリ 7:8 (口語訳)

7:8 そこで、たとい、あの手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いていない。あの手紙がしばらくの間ではあるが、あなたがたを悲しませたのを見て悔いたとしても、

参考に、『患難から栄光へ』第24章「退廃の都コリント」を読んでください。

コリントで福音を宣べ伝えるにあたって、パウロは、アテネにおける働きを特徴づけたものとは異なった方法を取った。……彼は難しい議論や討論を避けて、『イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは』、コリント人の間では、『何も知るまい』と決心した』（『希望への光』1447、1447 ページ、『患難から栄光へ』第24章）。

「パウロはある程度の成功を収めた……が、そこで見いだした人材で教会を築くことの賢明さを疑った。彼はコリントを非常に望みの薄い伝道地と考え、そこを去る決心をした。……

より有望な伝道地を求めてコリントを去ろうと考えていたとき、……主が夜の幻の中で彼にあらわれ、『恐れるな。語り続けよ。……この町には、わたしの民が大勢いるからだ』と言われたのである。パウロはこれを、コリントにとどまれという命令であり、まかれた種を主が増やしてくださるという保証であると理解した。……イエス・キリストの旗の下に、一つの大きな教会が加えられた」（『パウロ略伝』106、107 ページ、英文）。

【参考】——Ellen G. White, *Sketches From the Life of Paul*, pp. 106, 107.

“Paul had a measure of success,” but he “doubted the wisdom of building up a church from the material he found there. He considered Corinth a very questionable field of labor, and determined to leave it. . . . “As he was contemplating leaving the city for a more promising field, . . . the Lord appeared to him in a vision of the night, and said, ‘Be not afraid, but speak, . . . for I have much people in this city.’ Paul understood this to be a command to remain in Corinth, and a guarantee that the Lord would give increase to the seed sown. . . . A large church was enrolled under the banner of Jesus Christ.”

「パウロはコリントで1年6か月働いたと記録されている。しかし彼の努力は、この町だけに限られていたわけではなかった。……彼はコリントを拠点としたのである。……こうしていくつかの教会が設立された。……パウロが担当教会から離れるとき、彼の不在は、重みと力にあふれた手紙によって部分的に補われ、それらは概ね神の言葉として受け入れられた。……これらの書簡は、諸教会で朗読されたのである」（『パウロ略伝』109 ページ、英文）。

【参考】——Ellen G. White, *Sketches From the Life of Paul*, p. 109.

“It is recorded that Paul labored a year and six months in Corinth. His efforts, however, were not exclusively confined to that city. . . . He made Corinth his headquarters. . . . Several churches were thus raised up. . . . The absence of Paul from the churches of his care was partially supplied by communications weighty and powerful, which were received generally as the word of God. . . . These epistles were read in the churches.”

話し合いのための質問

- ① パウロは、自分がイエスの使徒であり、この召しが神からのものであると確信していました。私たちが何者であり、どんな召しを受けているのかを知るとは、なぜ重要なのですか。
- ② パウロは、コリントでの宣教活動を諦めて町を去ろうと思ったときがありました。なぜ彼は考えを変えたのでしょうか。宣教活動を諦めたいと思ったとき、このことはいかに役立ちますか。しかし、諦めるべき時もあるのでしょうか。
- ③ コリントの教会員は、周囲の文化に大きく影響を受けていました。これは、現代の私たちの間にも見られる厳しい現実です。どうすれば、世にしながら(ヨハ 17:11、15)、「世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごり」【口語訳「世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇」】(I ヨハ 2:16)によって影響されずにすむでしょうか。私たちの教会は、ほかにどんな形で、周囲の文化から悪影響を受けているのでしょうか。

10

ヨハ 17:11、15 (新共同訳)

17:11 わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。

17:15 わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。

I ヨハ 2:16 (新共同訳)

2:16 なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです。

ヨハ 17:11、15 (口語訳)

17:11 わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜った御名によって彼らを守ってください。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。

17:15 わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることではありません。

I ヨハ 2:16 (口語訳)

2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。

【参考】副読本にある《概要》を転載します。

コリントでのパウロの奉仕には、多くの困難が伴いました。コリントは、多文化的で多神教的、道徳的に墮落した都市であり、使徒言行録(使徒行伝)18:9、10 は、パウロがあきらめかけていたことを示唆しています。しかしイエスは、励ましを与えるために、幻を通して彼にあらわれました。その結果、パウロは「一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教え」ました(使徒 18:11)。彼がコリントを選んだのは、その戦略的な立場からでした。ここからローマ帝国全体に福音の普及を促進するためでした。多くの困難にもかかわらず、彼は大きな教会を設立しました。それにもかかわらず、周囲の文化とその悪徳は、教会の信者に大きな影響を与えました。そのため、パウロは、これらの問題やその他の課題に対処するために手紙を書きました。彼の手紙には、彼らへの深い思いやりがあらわれており、聖なる臨在にとどまり、一致し、愛する生き方を呼びかけています。これらの価値観は、今日の教会にとっても不可欠なものです。